# ［編　集　後　記］

『世界の日本研究』（第2号）の編集後記の場を借りまして、この雑誌の編集方針をいくつか書いておきたいと思います。しかし、編集方針といってもあまり固定的に理解しないでいただきたい。ここしばらくは、「暫定的」な方針です。提案がありましたら、遠慮なくお手紙下さい。

1. 本誌は、全体のまとまりを考えずに、活字にすることができるものから、掲載していきます。したがいまして、掲載された文章が書かれた日時や発表の場なども、バラバラになることが多くなります。これは、出来るだけタイム・ラグを少なくして出版できるように考えられた編集方針です。文章の最後には、文章が書かれた日時を明記いたします。
2. 掲載される文章は、日本語か英語にしたいと考えています。日本語は、日本研究者にとっての「職業言語」です。英語は、現在の学術世界の「国際語」だと考えます。現在編集途中のいくつかの文章は、英語から日本語に編集担当者の責任で翻訳したものもありますが、今後は原則として翻訳はいたしません。ただし、日本語・英語以外で書かれたものを掲載するように決めたときには、編集部の責任で日本語あるいは英語に翻訳いたします。
3. 投稿を歓迎いたします。ただし掲載するかどうかは、編集部の権限で行います。あまり長文のペーパーは、分量を減らしてもらうようにお願いすることがあります。また日本研究そのものは、掲載いたしません。あくまで本誌は、各国の日本研究事情の情報誌です。

ここで第2号について、簡単に説明をしておきます。リンハルト

氏の文章は、1990年12月13日に、国際日本文化研究センターの開所記念セミナーでの講演です。当日は、この他にプリンストン大学のマリウス・ジャンセン氏の「日本の開国」という講演がありました。これは、JAPAN REVIEW Vol. 2に掲載される予定です。講演会場には、たまたま日文研の客員教授として滞在中のベルント（フンボルト大学）・メラノビッチ（ワルシャワ大学）・フィアラ（カレル大学）の三氏もおいでになっていたことを付記しておきます。

マライーニ氏の文章は、すでにNICHIBUNKEN NEWSLETTER Vol. 2に掲載されたものの翻訳です。本誌の発刊が遅れたために、このような形になってしまいました。ワキサカ・ボライソ・ウィシュワナタン・リディーンの四氏の文章は、1989年の三月に開催した日文研の国際シンポジウム「世界の中の日本」に出席の際、林文月氏のものは1991年一月開催の「特別研究会」の際にそれぞれお話しいただいたものを文章化したものです。ウィシュワナタン氏の文章は、すでに広報紙『日文研』第4号に掲載されています。

1991年3月

園田　英弘